

達人篇

映画文学人生論

- 1096) 自然主義盛衰史 正宗白鳥 参考：文壇五十年
1097) 年月のあしあと 広津和郎 参考：散文精神について
1098) 鶏肋記 井伏鱒二 参考：半生記
1099) あの日この日 参考：虫のいろいろ
1100) 戦中日記 山本周五郎 参考：小説の効用

原則として、小説は（読者に対して）多くの効用をもつものである

どちらかというと三文文士のイメージの強い五人の作家の回想録や日記を読んでみた。人柄は偏屈で一癖も二癖もあるが、正直で誠実そうなどころもある。生活不適應者のようでありながら、しぶとく長生きをしている。人生の達人とよぶべきかもしれない。

自然主義文学盛衰史

正宗白鳥

年月のあしあと

広津和郎

鶏肋記

井伏鱒二

あの日この日

尾崎一雄

戦中日記・小説の効用

山本周五郎

五人のうち山本周五郎と井伏鱒二は流行作家の一面もあり、話題になった映画の原作者としても知られている。しかし、『青べか物語』や『山椒魚』の主人公を作者の分身と考えると、やはり売れない三文作家のイメージだ。

尾崎一雄は肺結核患者で、しかも短編しか書けない私小説作家。病身のまま、妻子をかかえて、どのように暮らしをたてるのか読者を心配させながら、現実には八十三歳まで生きた。

正宗白鳥は自然主義の作家だが、島崎藤村『破戒』や田山花袋『蒲団』のような代表作がない。初期の短編集『紅塵』『何処へ』『白鳥集』『二



達人篇

映画文学人生論

家族』などの発行部数は、いずれも八百乃至千部の出版、しかも『二家族』は残品が多かった。自然主義全盛期でもそうだったのだから、その後はほとんど売れていない。

そんな白鳥の『妖怪画』を読んで胸にぐっとくるものを感じ、自分でも小説を書くようになったというのが広津和郎だ。和郎の父の広津柳浪は深刻小説、悲惨小説の作家として硯友社で尾崎紅葉に次ぐ有力な存在だったが、硯友社の衰頹にともない、売れない作家になった。

柳浪の背中を見て育ち、白鳥の影響を受けて書いた小説が売れるとは思えないが、和郎は翻訳の印税なども合わせて文筆で一家の経済をよく支えた。父母に孝養をつくし、息子と娘の養育費や別れた妻と実質的な妻の生活費を負担した上に、晩年は松川事件の被告の弁護までした。

山本周五郎の『小説の効用』によれば、「原則として小説は（読者に対して）多くの効用をもつものである。よき一編の小説には、活きた現実生活よりも、もっと生々しい現実があり、人間の感情や心理のとらえがたき明暗表裏がとらえられ、絶望や不可能のなかに、希望や可能が見つだけられる」。読者に対しての効用は読者の一人ひとりが考える問題だが、売れない作家にとっても小説が効用をもつことも時にはあるようだ。

露の世は露の世ながらさりながら 小林一茶